

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 読書感想文雑感

山崎 博久
(未来創造学部教授・読書感想文コンクール審査委員長)

⇒ 第14回 読書感想文コンクール 審査結果発表

⇒ 最優秀賞
『戦争を記憶する 一広島・ホロコースト
と現在一』を読んで考えたこと

諸星 六郎
(薬学部薬学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
プライドの定義～その道を究めて～

杉田 佑夏
(薬学部薬学科 2年次生)

⇒ 優秀賞
『パーラ』から“言葉”を考える

中村 美菜
(薬学部薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞
亡き人への恩返し

小谷 有生
(未来創造学部国際教養学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
『羅生門』を読んで

浅田 陽菜
(未来創造学部国際教養学科 1年次生)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次

いのか？この疑問はキリスト教を知ると解ける。そしてキリスト教を知るには、できればその母体のユダヤ教も知っておくとよい。ユダヤ思想の根源は旧約聖書にある（ただし「旧約」という言い方はキリスト教徒のもので、ユダヤ人は絶対に「旧約」とは言わない。なぜなら今でも有効な契約だからである）。ゲーテの『ファウスト』の第一部冒頭、「天上の序曲」でメフィストフェレスが神と賭けをするシーンは、あきらかに聖書の「ヨブ記」の冒頭のシーンを借用している。「ヨブ記」の主題は一言でいうと、「なぜ善人が苦難にあい、悪人が栄えるのか」という人類社会の永遠の不条理に対する問いであり、文学のみならず広く西洋の芸術や思想に大きな影響を与えた。神に論争を挑んだヨブの痛切な問いに対して神は正面から答えていないように見えるがゆえに、心理学者ユングは『ヨブへの答え』という題名の書を著した。

他方、『ファウスト』の第二部になると、今度は一転して古代ギリシャ文化のオンパレードである。古代ギリシャの神話や人物・歴史が縦横無尽に駆使され、これを知らないと荒唐無稽の作り話にしか思えない。ユダヤ・キリスト教と同様に、古代ギリシャ・ローマ文化も、今なおヨーロッパの政治・法・科学・芸術・哲学・思想に大きな影響を与え続けている。

今回の入賞作に、ラルフ・イーザウの『パーラ（上）沈黙の町』の感想文がある。その中で「初めに言葉があった」というヨハネによる福音書の有名な冒頭文が引用されているが、この原文の意味はふつうの日本人が抱く印象とは違う。というのは、「言葉」の原語はギリシャ語の「Λόγος（ロゴス）」であり、これは他に「真理」「法則」「理論」などの意味を持つきわめて多義的な語である。ロゴスという概念は哲学者ヘラクレイトスによって（万物流転の中でも永遠に不変なものとして）「真理」「法則」の意味で使われ、ストア学派にも受け継がれたのだが、その歴史を背景に、ここでは真理の言葉を体現する者としてロゴスが擬人化されている。そして、ギリシャ語は決まった語順はなく重要な語や強調したい語を先に配置する言語なので、「初め」が冒頭にあるということは「初めに言葉（ロゴス）があった」ではなく、「このロゴスがあったのは初めからである」という表現のほうが原意に近い。では、この「初め」とはいつの時か？・・・天地創造の時である。したがって、その後続く「言葉は神とともにあり、言葉は神であった」は「ロゴスは神とともにあり、ロゴスは神であった」となり、実はロゴスとはイエス・キリストのことであり、天地創造の時から存在していたという意味だとされる。このように、知ると知らないのとでは印象は大きく異なるだろう。

ともあれ、読書とは著者との対話であり、感想文とは対話を経た読者による創作であり、単なる本のあらすじの紹介ではない。今後も、学生諸君が多くの著者と対話を重ね、自らの思考を鍛え、成長していくことを願っている。



第14回 読書感想文コンクール入賞者の皆さん

第14回 読書感想文コンクール

審査結果発表

応募作品311編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

・最優秀賞

諸星 六郎	『戦争を記憶する -広島・ホロコーストと現在-』を読んで考えたこと	(薬) 3年
-------	-----------------------------------	--------

・優秀賞

杉田 佑夏	プライドの定義~その道を究めて~	(薬) 2年
中村 美菜	『パーラ』から“言葉”を考える	(薬) 1年
小谷 有生	亡き人への恩返し	(未) 3年
浅田 陽菜	『羅生門』を読んで	(未) 1年

・佳作

重松 薫	『高瀬舟』を読んで	(薬) 1年
杉野 佳奈	周りの存在	(薬) 1年
松坂 侑美	いつか、わたしも	(薬) 1年
石井 昂	『頭と心と体を使う英語の学び方』を読んで	(未) 3年
野村 未帆	『星の王子さま』を読んで	(未) 2年

・努力賞

石井 風帆	人生はどのように生きるかが一番重要	(薬) 1年
岡井 珠緒	『アンネの日記』を読んで	(薬) 1年
木山 美佳	『夏の庭』を読んで	(薬) 1年
小坂 佳佑	物理が苦手な人が物理実験の本を読んでみたら	(薬) 1年
越嶋久美子	幸せとは、知能とは何か。	(薬) 1年
細川 誠代	生と死、立場と考え	(薬) 1年
気谷 梢	『終末のフール』を読んで	(未) 2年
下田 歩実	『横道世之介』を読んで	(未) 2年
森松 美名	『モンスター』を読んで	(未) 2年
松本みのり	『太平洋戦争最後の証言』を読んで	(未) 1年

・ナイスタイトル賞

杉田 佑夏	プライドの定義~その道を究めて~ (『下町ロケット』を読んだ感想文)	(薬) 2年
小坂 佳佑	物理が苦手な人が物理実験の本を読んでみたら (『世界でもっとも美しい10の科学実験』を読んだ感想文)	(薬) 1年
小谷 有生	亡き人への恩返し (『陽だまりの詩』を読んだ感想文)	(未) 3年

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

最優秀賞

『戦争を記憶する ー広島・ホロコーストと現在ー』を読んで考えたこと

薬学部薬学科 3年次生 諸星 六郎



書名 戦争を記憶する ー広島・ホロコーストと現在ー
著者 藤原 帰一
出版社 講談社

本書は、歴史認識の国による違いを、主に日本とアメリカの戦争史観を題材として述べられたものである。戦争を記憶する博物館として、広島市の平和記念資料館とワシントンのホロコースト博物館を取り上げ、両者の問いかけるものの相違点から論を始めている。一言で言えば、前者は戦争そのものを絶対悪とすることで「絶対平和」というメッセージが発せられているのに対し、後者はそうではなく、「殺人者や破壊者などの絶対悪に対しては、立ち上がらなければならない」とし、そのための戦い（つまり戦争）は正戦である、というメッセージであると筆者は言う。そして両者の違い、つまりは日本人と米国人との戦争そのものに対する認識の背景が何に由来しているのかという点について論が進められている。

筆者は本論の中で、「正戦論と反戦論を、一般論として議論することも両国の文化と伝統の違いに追いやってしまうことも、説明にはならない。先の戦争がどのように記憶され、その記憶が支えられたのか、それが問題の核心にある」と述べている。つまり、一般的には米国は好戦的な印象を持たれることが多いが、これは国民性などでは決してなく、その直前の戦争によっては、米国世論・政府が反戦に傾くことはもちろんあるということである。しかしそう述べた上で、筆者は「アメリカは、第二次世界大戦に関しては、正戦という認識が根強い」と指摘している。第一次世界大戦に比べてはるかに多くの国民を動員した戦争だけに、正しくないということになれば、犠牲者に対して正当化できない。死者の数一つとっても第二次世界大戦の正義を疑うことは許されなくなっている。ゆえに当然、原爆投下という行為も「正戦」のうちの一部ということになる。

しかし、アメリカがあくまで第二次世界大戦から「反戦」ではなく「戦争そのものに意義を見出した」最大の原因、それはアメリカがあくまで「戦勝国」である、という点が大きく影響していると思う。この点を著者は少しだけ言及しているに過ぎないが、私は強く指摘したい。なぜならば、アメリカは第二次世界大戦でかなりの犠牲者を出したにもかかわらず、その教訓をベトナム戦争で生かすことができなかったことを考慮すると、アメリカは「終わり良ければ全て良し」という結論に至ってしまったという側面があると思うからである。

昨年の8月13日の22時から、NHKで「ペリリュー島の戦い」についてのドキュメンタリー番組が放送された。この島は太平洋戦争での日本軍とアメリカ軍の激戦地の一つであるが、この戦いは、日本軍がそれまで短期決戦の戦法を採っていたのが、長期持久戦に戦法を変換した最初の戦いであると紹介されていた。それまでと同様、短期決戦の象徴である「バンザイ突撃」を想定していたアメリカ海軍は、持久戦に戦法を変えた日本軍相手に多大な犠牲者を出してしまうわけであるが、その最大の原因は、日本軍による「ゲリラ戦」に対応することができなかったことにある、と番組では指摘されていた。島の地形を熟知していた日本軍はその地形を巧みに利用し、岩山に潜むことで米海軍をおびき寄せ、接近戦で決着をつけるべく「ゲリラ戦」を行ったわけであるが、このゲリラ戦というものが、いかに攻める側の兵士を疲弊させるかということは、この番組を観る以前に、多くの人々はベトナム戦争で知っていたと思われるし、私もそのようなことを見聞きしたことがある。しかし意外だったのは、米軍がゲリラ戦に苦しんだのはベトナム戦争が初めてであったとそれまでは思っていたが、既に太平洋戦争の時点で米軍が「ゲリラ戦」を体験し

ていたという事実である。

ベトナム戦争の悲劇の一つとして、ゲリラ戦で心身共に疲弊した兵士の姿というものが過去に度々クローズアップされてきたわけであるが、この現象は既に太平洋戦争で起きていたわけである。つまり、太平洋戦争で兵士が体験した悲劇が、そのままベトナム戦争で再現されたということである。これはつまり、先の大戦の戦場での悲劇が全く反省されていないということではないだろうか。そしてこの反省不足というものは、やはりアメリカが太平洋戦争の戦勝国であったために、結果として、「多大な犠牲は出したが、無事勝利できたのだから、終わり良ければ全て良し」という結論になってしまったことに起因していると思う。逆に敗者（つまり日本）は、完膚なきまでに叩きのめされ、多大な犠牲者を出したあげく敗北したわけであるから、当然「終わり良ければ全て良し」となるはずもなく、むしろ「こんなことはもうたくさんだ」という、うんざりした気持ちになるのは当然のことであり、それが原因となり結果として「戦争そのものが悪である。良い戦争、正しい戦争など無い」という風潮が生まれたわけである。繰り返すが、戦勝国がそのような概念を抱くわけがない。なぜなら勝利した側なのだから。

また、戦勝国であるために「正戦」という認識が強い以上、先にも述べたように、原爆投下に関してもアメリカ政府・国民共に「正当な行為」という認識が現在でも変わらず根強い。

一時期、アメリカ政府に対し、広島・長崎への原爆投下の謝罪要求が叫ばれ、現在でも原爆の犠牲者やその遺族はそれを望んでいるのかもしれないが、原子爆弾投下に対する謝罪をアメリカ政府が行うことは、残念ながら絶対には有り得ない。またアメリカ大統領が広島・長崎の記念式典に出席することも、また有り得ないと思われる。その理由は、アメリカが抱く「第二次世界大戦は正義の戦争であった」という認識が揺るがないためであり、上記のことを仮に行えば、極端なことを言えばアメリカ合衆国の価値観が崩壊する可能性があるためである。先にも述べたことであるが、一般的な認識として、アメリカは今も昔も好戦的であるという認識を持つ人が多いように思うが、著者が指摘するには、実際にはアメリカ国内でも「朝鮮戦争やベトナム戦争では、戦争の正義が怪しまれた」わけである。ベトナム戦争当時、日本で反戦運動が起きたことは有名な話であるが、当事者であったアメリカでも、本国市民による反戦運動は起きているのである。しかし続けて著者が指摘するには、「それでも、第二次世界大戦の正義を疑うアメリカ人は少ない」ということである。ゆえに、上記の行動をアメリカ政府がとることは、日本に当てはめれば、天皇陛下が「原爆投下により、戦争終結がもたらされたわけだから、原爆投下を非難するべきではありません」と発言するに等しく、それくらい非現実的なことであると思う。

ゆえに、原爆被害者や遺族の方々のお気持ちは察するに余りあるが、それでも米国政府への謝罪要求は、明らかに無意味であり、徒勞以外の何物でもないと断言できる。同じ日本人として「そこまでする必要があったのか」という疑問は当然抱くが、それはあくまで原爆を投下された側の理屈であり、投下した側の事情は全く考慮されていない。こう述べると、投下した側の事情など、そもそも考慮する必要があるのかと言いつ返されてしまいそうであるが、いくら日本人にとって悲劇的なことであっても、こと戦争中に起きたことであれば、戦う双方の事情をしっかりと認識する必要があると思う。戦争中に起きた悲劇と、一般の犯罪によってもたらされた悲劇を同列で論じることはできないと思う。

昨年8月1日の新聞に「先月28日、エノラ・ゲイの航空士だったセオドア・ヴァン・カーク氏が93歳で死去した」という記事があった。広島に原爆を投下した米軍のB-29爆撃機「エノラ・ゲイ」の搭乗員の最後の生き残りであった彼は、原爆投下直後、次のような感想を抱いたそうである。「これで戦争が終わる。ほっとした。」また生前彼は「国家は人命の喪失を最低限に抑えて戦争に勝つため、やるべきことをやる勇気を持たねばならない」と語っていたそうである。14万人の一般市民を瞬時に殺戮する兵器を使用することが、本当に「やるべきこと」だったのかどうかという疑問を抱くことは日本人なら当然であるかもしれないが、彼が心身ともに疲弊した一人の兵士であり、戦争の終結を切に願っていたということもまた事実である。決して、大量虐殺そのものを目的として原爆が投下されたわけではなく、負けをなかなか受け入れない、屈強な敵を屈服させ、戦いを終わらせるための最終手段として原爆投下が行われたわけである。

原爆投下に関する問題は、双方に双方なりの言い分があるために責任の所在が明確にならず、解決しない問題であるわけであるが、これを解決しようとするのではなく、日米共に「お互いにとっての戦争の悲劇」として、いつまでも両国で共有してゆくということが良いのではないだろうか。「問題」だから当然「解決すべき」ということになりがちであるが、「無理に解決に導く必要のない問題」という問題があっても良いのではないだろうか。これはなにも、問題を棚上げしていつまでも日米でいがみ合えということでは決してなく、「戦争とは、このような難題を引き起こすものである」ということを双方がいつまでも忘れずに認識するために存在し続ける問題という位置づけに留めておくことが、却って日米双方が前向きに進んでゆくために必要なことであると思う。

優秀賞

プライドの定義～その道を求めて～

薬学部薬学科 2年次生 杉田 佑夏



書名 下町ロケット
著者 池井戸 潤
出版社 小学館

本書の舞台は、高性能小型エンジンを製造する中小企業・佃製作所である。社長の佃は、かつてロケット開発に失敗し、研究員を辞め、家業を継いだ。佃製作所は一流の技術をもつが、資金繰りに苦しみ、余儀なく社員のボーナスカットまでしていた。この状況は、現代の日本企業の象徴とも言える。

世界では、日本製品は高品質であると評価されている。しかし、私達消費者は品質より価格を重視する傾向がある。大企業生産者は、機械により大量生産・人件費削減を行い、低コストを実現している。そのため、多くの消費者から利益を得ることができる。このようにして、大企業は需要の変化に対応している。一方、機械より手作業で賄う中小企業や小売店は、外国製品にも押され、厳しい状況に置かれている。需要の変化についていけず、廃業・倒産に追い込まれた中小企業や小売店は少なくない。その一因として、日本人の、日本製品に対する関心が希薄になっていることが考えられる。

佃製作所は、大企業・帝国重工から、ロケットに搭載する新型水素エンジンの特許を売るように要求される。しかし、佃社長はそれを断り、部品供給を提案する。帝国重工が提示した売却価格は、佃製作所の経営安定のためには十分な金額であった。特許を売ってしまえば、社員の負担が減る。他方、部品供給はロケット打ち上げが失敗すれば、その責任を背負わされる可能性がある。佃社長の一存で、佃製作所は倒産してしまうのではないだろうかと思われた。

「カネの問題じゃない」、「これはエンジン・メーカーとしての、夢とプライドの問題だ」と佃社長は言い放った。この言葉に私は唖然とした。結局、佃社長にとって社員の生活より自分の夢のほうが大事なのだろうか。ロケット打ち上げに再挑戦したいという願望のために、社員達を犠牲にするつもりなのだろうか。正直、私は佃社長の考えに失望した。なぜ佃社長は夢とプライドをかけて、ハイリスクな選択をしたのだろうか。私はその答えを知りたくて、読み進めていった。

エンジン部品の特許を手に入れた帝国重工は、佃製作所を圧迫し始める。佃社長の考えに反対していた若手社員・江原は、こんな言葉を述べた。

「実際はじまってみたら俺自身が否定されてるような気がしたんだよ。」
腹の底から沸々と込み上げてくる悔しさ―「世の中は理不尽なものだ。」という某先生の言葉が頭に浮かんできた。社会には自分の力では及ばないことがあるのだなと私は無力感に襲われた。江原もこの理不尽な社会から目を逸らしたかったに違いない。しかし、彼は現実に立ち向かい、自社の技術力の高さに気が

ついたので。そして、水素エンジンは、佃社長や江原達が懸命に働いてきた軌跡、いわば彼ら自身であると私は思った。

「佃品質。佃プライド。」これは社員達自らが掲げたポスターの言葉である。言葉からは、大企業に屈しないという社員一丸となった熱い想いが伝わってきた。社員達は言葉通り、夜を徹して帝国重工に立ち向かった。その結果、部品供給が認められたのである。私はいつの間にか佃社長達を応援していた。彼らのエンジンを載せたロケットを飛ばしてほしいと心の中で願っていた。自分の考えを振り返ってみると、私は「佃プライド」の意味を誤解していたことに気がついた。このプライドは、自分の弱さを隠し、保身や名誉のために強さを誇示する頑なな心ではない。佃社長達にしかつくれなかったものを自分達で守り、愛し、進化させていくこと。それが「佃プライド」であると私は考える。

佃製作所では、全て機械任せにするのではなく、手作業も取り入れていた。この手法は、効率や精度が悪いように思うが、実際、手作業のほうが融通が利くと佃社長は言う。既存の概念が覆され、私は驚いた。さらに、佃社長は社員達を犠牲にした訳ではないことを私は理解した。佃社長は彼らの実力を見込み、信頼していたのだ。彼らは、長い年月、試行錯誤を重ね、技術を磨き、その道を究めてきた。このプロフェッショナルとしての実力が、確固たる信念、「佃プライド」を支えているのだ。言い換えれば、プロフェッショナルだからこそ手にすることができるプライドと言えよう。

佃社長達が直向きに働く姿から、誰もが努力次第でプロフェッショナルになり得ることを知った。どんな境遇にあっても、現実を悲観せず、自分の仕事を究めること。夢の実現に向け、胸の奥に情熱の火を灯し続けること。その必要性が現代人に求められているのではないだろうか。そして、私もその一人であると痛感している。私は現在、薬剤師になるための勉強をしている。薬剤師としての道を究め、プロフェッショナルと言われるような実力を身につけたい。「佃プライド」を目指して。

優秀賞

『パーラ』から“言葉”を考える

薬学部薬学科 1年次生 中村 美菜



書名 パーラ（上）沈黙の町
著者 ラルフ・イーザウ
出版社 あすなる書房

「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」

ヨハネによる福音書第一章一節から始まる、ラルフ・イーザウの作品、『パーラ』を読んだ。

そもそも言葉とは一体なんなのか。講談社の日本語大辞典で調べてみると、「人間が思想や感情を他に伝えるために用いる語。単語や語句。」とある。先述したヨハネによる福音書には第一節からも続きがあり、こう記されている。

「このことばは、初めに神とともにあった。万物はことばによって成った。成ったもので、ことばによらずに成ったものは何一つなかった。ことばの内に命があった。命は人間を照らす光であった。」

要するに、言葉があるからこそ、その物は“それ”になるのだ。例えば、目の前に長い棒が立っていて、私たち人間がそれを“木”と言葉にするから、名前を付けるからそれが“木”になるのだ。

日本にも言霊ということばがあるように、ことばには不思議な力が宿るとされている。

さて、『パーラ』に戻るが、パーラは詩人の町、シレンチアに住む女の子だ。この町の人々はなによりもおしゃべりが大好きで、詩人が一般的な職業として定着している。そんな町で一人の語り部であり、パーラがノンノ（おじいちゃん）と慕うガスパーレが突然言葉を失ってしまう。ガスパーレをはじめに、

町の人々が次々に言葉を少しずつ忘れ、無くしていく。シレンチアの人々はこれ以上言葉がからだからこぼれてしまわないように口をつぐんだ。その頃、町の富豪ジットが各家庭にパッパラ・オウムというしゃべるオウムを与え始める。

「そしてあなたの賢い選択をお祝いもうしあげます。あなたが知りたいと思うことは、いまからわたくしがおつたえいたしましょう。告げ口、悪口、最新ニュース、おもしろい話、こころはずむ歌、なんでもござれ。これで、あなたはわざわざ広場まで足を向ける必要がなくなりました。家にいながらにして、わたくしからなんでも手に入れられるのです。日をへずして、わたくしなしではいられなくなるでしょう……」(『パーラ沈黙の町・上』110ページより)とパッパラ・オウムは言うのだ。パーラの両親も、町の人々もあつという間にこのオウムの知識に、話に夢中になってしまう。

「シレンチアの人々は、しだいに収入も支出もジットだのみになり、ジットの店の手軽さにもなれていった。買い物に行っても、疎遠になった人々はたがいに声をかわすことなくすれちがうだけになり、時間と金の節約になった。」(『パーラ沈黙の町・上』124ページより)言葉をなくし始めた人々は、人との交流もなくしていく。

この後の展開は王道というか、主人公であるパーラがガスパーレの息子、ジュゼッペと共に言葉を取り戻すためにジットの居城へ出掛けるという話だ。

この物語は一見、架空の町を舞台に、架空の人物であるパーラが冒険を繰り広げるファンタジーのようにしか見えないが、今現在の日本、そして世界を現した物語になっている。作中に出てくるパッパラ・オウムは、テレビやゲーム、インターネットに相似している。私たちは気になることがあると、すぐにスマートフォンを使って、インターネットを使って調べる。言いたいことは直接言わずにネット上の掲示板に匿名での書き込み。様々な知識、情報を教えてくれるパッパラ・オウムの普及により、黙り込んでしまうシレンチアの町の人々は、人と人との関わり方がわからなくなってしまった現代の人々を、コミュ障という言葉が広まっている現在の社会を思い出さずにはいられない。

言霊の幸(さきわ)う国と呼ばれた日本も、今ではこころのこもった言葉をなくしかけている。了解を「りょ」という。共感を「それな」の一言で済ませる。ありがとう、という人に感謝を伝える温かく、大切な言葉でさえ「あざ」のたった二文字で済ませてしまうような人が増えているのだ。

言葉は時代と共に変化するものである、と言う人もいる。たしかにそうだ。女性に対して気の利いた返答を即座にする男性はなかなかいないなあというのをわざわざ「女の物事ひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男は、ありがたしきものぞ」(『徒然草』より)なんてわざわざいわないし、会話にどれくらい時間が掛かることだろう。

このように、時間と利益を追求した結果が「りょ」であり、「あざ」であるのだ。まさしく「それな〜」である。

人々は時間と利益とを引き換えに言葉を、こころを失いかけている。人との関わり方を忘れてしまいかけている。

このままでは、いくら政治がうまくいき、表面上豊かな生活が訪れようとも、争いはなくなるはずである。同じ言葉をはなし、結束してバベルの塔を建てた旧約聖書の人々に対して、神様は人々を結束させないように使う言葉をわけ、各地に散らばせたという。神話の話ではあるが、言葉が分からなくなってしまったからこそ争いが産まれるようになってしまったのではないだろうか。

今のように、中身のない言葉ばかりを使って人とコミュニケーションをとっていても、相手に気持ちは伝わらない。本意は伝わらない。伝わらないからこそ争いが絶えず起こってしまう。

これからは、改めて言葉の持つ力について考えていくべきではないのだろうか。本当の平和、幸せを得るためには、心のこもった言葉が必要になるはずだ。と私はラルフ・イーザウの書いた『パーラ』を読んだのであったのである。

優秀賞

亡き人への恩返し

未来創造学部国際教養学科 3年次生 小谷 有生



書名 陽だまりの詩（ZOO 1収録）
 著者 乙一
 出版社 集英社

この物語の主人公の女の子は、冒頭の部分では何の感情も持たず、目に飛び込むものは単に情報として処理するだけの無感動なロボットだった。彼女が作られた目的はただ一つ、博士の死を看取り、埋葬することだった。博士は自分をきちんと埋葬してもらうために、彼女に死を理解させようとする。彼女は、彼と一緒に日々を過ごし、その生活の中にある生の輝きに触れることによって、愛という感情を覚え、死というものを理解していく。

他人の死は、生きていく上で避けることの出来ない出来事であるため、死を理解するということは、全ての人々が否応なしに覚えていく類のことだと思う。しかし、大切な人が亡くなったときの悲しみは、亡くなるその瞬間に直面した後でさえ、その傷が癒えるまでずっと計り知れないものだと思う。人によっては一生消えないこともあるのかもしれない。喪失感が大きすぎて泣くことすらできないかもしれない。死を理解し、涙を流すことが、その人の死を悼むことにつながる訳ではないと思う。それでは、大切な人を失ったときに、残された人にはいったい何ができるのだろうか。

私が大学二年生の時に、大好きだった祖母が亡くなった。それは私がアメリカに留学中の出来事だった。私は留学に行く少し前に、祖母の命があと数週間だということを知らされていた。祖母はここ数年寝たきりで、私は月に1・2回程度のペースだったが、何度もお見舞いに行った。祖母の死を受け入れるための心の準備をする時間はたくさんあるはずだった。

最後に祖母のお見舞いに行ったのは、アメリカに行く少し前だった。祖母の病状を聞いた親戚みんなが祖母の病室に集まったのだ。祖母は目を覚まさず、私達に気付かなかった。私達は何度も祖母に呼びかけたが、結局私たちの声は祖母に届かなかった。病室を出る時、私の心は張り裂けそうだった。「もう会えなくなってしまう。どうしてもっと長く傍に居てあげられないのだろう。」と思うと、涙が止まらなかった。

主人公は、いつも追いかけてこをしていた兎の死をきっかけに、死を理解し、博士の死についても考える。この時彼女は彼が自分を作ったことを恨むが、同時に彼の死に対する恐怖を感じていた。彼の死が目前に迫ったとき、彼女は彼に自分を作ったことに対して、怒りと感謝の両方の気持ちを伝える。そして、最後の瞬間まで彼の傍に付き添った。

私が祖母の死の知らせを受けたときに後悔したのは、やはり最後の瞬間を看取ってあげられなかったこともあるが、何より、「ありがとう」を伝えられなかったことだった。人の死の形は様々で、余命を宣告されることもあれば、突然だったりもすると思う。考えてみると、私みたいに感謝を伝えられないことの方が多いのではないか。何故なら、祖母が死ぬことが分かっていた私にとってでさえ、死の瞬間は突然だったからだ。それならば私達は何をもって、亡くなってしまった大切な人に、伝え損ねた感謝の気持ちを示せば良いのだろうか。

博士の死を看取った主人公は、彼を埋葬することと、自分が変わらずに生き続け、彼の墓に毎日花を供えることを心に誓う。大切な人の死を目の前にしたとき、生きていく私にできることは、その人を想い、花を添えることだけかもしれない。しかし、大切な人の眠る墓がさみしくないように花を供えること、そしてその人の記憶を持って生き続けるということは、何よりも意味のあることのように思う。せめて記憶

の中でだけでも、一日でも長く生かしてあげること、その記憶をいつまでも大切にすることこそが今を生きている私にできる、祖母への精一杯の恩返しだと思う。主人公が博士にしたように、私も祖母の記憶を大切に、祖母の分まで強く生きようと思う。

優秀賞

『羅生門』を読んで

未来創造学部国際教養学科 1年次生 浅田 陽菜



書名 羅生門
著者 芥川 龍之介
出版社 角川書店

高校生のときに読んだ物語の中で印象的だったものをもう一度読んでみようと思い、芥川龍之介の『羅生門』の本を手に取りました。現代の私たちの生活とはかけ離れた独特な世界観であるにも関わらず、誰もが共感できる人間の心理を組み込んだ内容に、当時の私は圧倒されたのを覚えています。

物語の主人公は一人の下人です。ある雨の降る古びた羅生門の下で、主人に暇を出されてしまった下人が途方に暮れていました。明日の暮らしをどうにかするために盗賊になろうかと思っはみてもなかなか踏み切れない、そんなときに、生きる糧を得るために悪事とわかって死人の髪の毛を抜く老婆に出会いました。老婆は自分が生き抜くためであり、この死人も生前は悪事を働いていたのだから許されることだろうと口にします。下人はその老婆に対し正義感を燃やしていましたが、しまいにはその言葉に納得し、その老婆の着物をはぎ取ってしまいます。そして「私もそうしなければ飢え死にになってしまう体なのだ。」と言い残して消え去るという選択をしました。

飢え死にをするか盗人になるか、今後の人生が二択だったらどうするでしょう。もし私の下人の立場だったら、恐らく下人と同じようにそう簡単に決心はつかなかったと思います。でも、自分自身に悪事を働くより飢え死にを選ぶ勇気があるとも思えません。だとすると、私も下人と同じ行動をとってしまうかもしれません。下人の選択した行動は決して正義的なことではないと思います。しかし自分がその場にいたとしても、飢え死にをすることを選ばずに追い剥ぎをすることが悪と言えないと思います。それは、生きたいという生命への執着があるからです。

最初は正義感を抱いて老婆がしている悪事を暴いてやろうとした下人ですが、その時彼は「少し前に自分が盗人になろうとしていたことなどとうに忘れていた。」という描写があります。では何故下人は老婆の悪事を知って怒りが込み上げたのでしょうか。下人は妬ましいと思ったに違いない。自分がどうしても決心できなかった盗人になり悪事を働くことを、目の前の老婆は平気で行っているのだ。しかも自分自身が積極的に肯定できなかった行為を許されることだと言う。それを聞いた瞬間、下人の中で善悪の基準が裏返ったのではないだろうか。

人は無意識に自分を正当化してしまうのです。それは自己防衛に基づきます。

『羅生門』は「生きる」ということの人間の本能を描いている物語だと思います。このまま飢え死にしまうのか、それとも悪事だとわかっていても盗人になってしまうのか。芥川龍之介が描いたのは、人間はどうあるべきかなどという理想ではなくて、命の現実だと思いました。幸いにも私達は、この命の現実を目の前に突きつけられているような極限的な状況のない日常を生きています。しかし何かのきっかけで、このような「善」「悪」の分岐点に立たされることもあるはずで

私は『羅生門』を読んで、人間とはつねに「善」と「悪」が重なった存在であると感じました。また同時に「善」と「悪」は状況により、揺れ動き、ひっくり返る、表裏一体なものであるのだと気付かされま

した。そして「正義」とは、「善」とは何であるか、その基準は思う以上に複雑で私にとっては難しい問題となりました。しかし、これから生きていく経験の中でその基準を、自分が納得できるようにしっかり考えていこうと思います。

☆☆☆最優秀賞、優秀賞の皆さんからの受賞後のコメントは、
北陸大学図書館報WEB版のふくろう便りに掲載します☆☆☆

審査委員から一言



審査委員

安田 優

(未来創造学部准教授)

今回の読書感想文コンクールで上位に残った作品には、甲乙つけかねる出来映えのものも多く、順位化することが難しいものもありました。各々の書き手が本を読んで、感じたことや考えたことをまとめ、読み手にしっかりと伝えることができていたと思います。審査員として、皆さんの感想文を楽しく読ませていただきました。

能動的な読書を通して、私たちは他者の考えを知り、視野を広げたり、共感力や理解力を高めたりすることができます。また、読書経験をきっかけとして、新たな考えが浮かぶこともあるかもしれません。読書は私たちの人生を豊かに実りあるものにしてくれるのです。このコンクールのために久々に本を読み、改めて読書の面白さを感じた人もいるでしょう。その感触が薄れないうちに、図書館を活用して多くの本に接し、大学生活を更に有意義なものにしてください。



審査委員

東 康彦

(薬学部講師)

正直に言えば、私は読書が苦手だというより、読書感想文の作成が前提となった読書が極めて嫌いだ。小・中学校の夏休みの宿題は、決まって読書感想文であり、これが苦痛であったことを思い出す。そんな私が審査委員でよいのか、そう矛盾を感じながらも感想文の審査に専念した。

読書感想文の作成とは、選書から始まり、読書にふけり、感銘を受けたことを書くまでの一連の作業である。これは重労働であるはずだが、受賞者には、そのプロセスを悩みとしない潜在能力があるのだろう。

受賞者間の得点差はほんの僅差であったが、これは、私のような審査委員がいたため、正当に評価されていたとは言い難い。だから、佳作も優秀賞もその価値に差はないと考えてよい。受賞者には考えたことや感じたことなどをまとめる力が備わっている。この能力が社会で必要とされるものであるということ、世に出てから強く知ることになるだろう。「本コンクールは社会貢献のためのプチ登竜門である」と私は考えている。

読書は空想力を養い、心を豊かにする。考えたことを文章で表現することの難しさが、いつか面白さに変わったとき、視野の広い自分自身が形成されていると思う。そう信じ、今後も読書を続けてほしい。





審査委員
毎田 千恵子
(薬学部助教)

今回、審査員をして感じたことは、いくつもあります。まず、本の選択にも個性が出ていると思いましたし、こんなに多くの学生が本を読んで感じたことを文章に出来る能力を持ち、感じたことだけでなく、そこから更に深く考えていることは素晴らしいと思いました。また、単に感想を述べるだけではなく、本を読んだことがきっかけで広がった自分の世界や考えを述べる事が出来ている作品もありました。私が読んでいない本の感想文を読んで、今度読んでみなければと思った作品もありました。優れた感想文が多く提出されており、審査委員の中でも、意見が分かれていて受賞作を選ぶのが難しいという経験もしました。

文章を書くという事は、これから社会に出て必要な事であり、そのような能力を持った多くの学生が在学していることを頼もしく思いました。これからも多くの本を読んで自分の世界を広げるとともに、他の人にも発信して行ってほしいと思いました。



審査委員
川端 健司
(未来創造学部助教)

読書の良さの一つとして、主人公（筆者）の視点、自らの視点、第三者としての視点など、多くの視点から物事を捉える力を養うことができる点が挙げられます。今回応募された作品全体を通して感じたことは、想像以上にその力を身につけた学生が多いこと、すなわち、心の豊かな学生が多いということです。また、感想文だけではなく、そのタイトルにユーモアを感じさせる作品が数多く見受けられたことにも驚きました。独創性溢れるタイトルや感性豊かな感想文から、それぞれの学生の人生観を垣間見ることができたように思います。

今回、審査員という立場で様々な感想文に触れ、改めて読書が持つ力を実感しました。読書から得た感性や知識は今後の人生において大きな財産となります。今回応募した学生もしなかった学生も、新たな一冊を手にし、豊かな心を育み、社会を生き抜くための活力にしてもらいたいと思います。



寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
「薬局プレアボイド：見逃さない！薬剤師の事例 103」ほか 計 3 冊	三浦 雅一（薬学部長）
「陽のあたる場所」	安田 優（未来創造学部准教授）
「平成 27 年度版 戸籍実務六法」	胡 光輝（未来創造学部准教授）



北陸大学図書館報 NO.38 平成27年3月20日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library.html

※北陸大学図書館報は、ホームページでもご覧いただけます。